



TITLE:

飛彈山脈於ける構[造]土の新紹介

AUTHOR(S):

西村, 健二

CITATION:

西村, 健二. 飛彈山脈於ける構[造]土の新紹介. 地球 1928, 9(6): 447-448

ISSUE DATE:

1928-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183449>

RIGHT:

飛驒山脈に於ける構造土の新紹介

西村 健 二

數年前田中阿歌磨子爵は乘鞍岳龜ヶ池附近に於て輪狀に連れる岩層の地表を發見せられアラスカ、スピッツベルゲン等に生ずる多角土(Polygonboden)に相當するものなるべしとせられたり。是日本に於ける構造土に關する第一の發見なり。余一昨昨年及一昨年夏季飛驒山脈の殆んど大部を踏査するを得、その際この構造土に對し若干の注意を拂ひたる結果乘鞍岳の一峰摩利支天(約二八二〇)及白馬鎗岳の南方に輪狀ならすして並行列のものを觀察し得たるにより之が紹介をなさんとす

一、場所

- (一) 乘鞍岳最高峯東南(二千八百二十米の閉鎖曲線)の摩利支天岳の四周及頂上部のものは鮮明なり。
- (二) 同岳五ノ池東南鞍部附近及權現池畔のものは不鮮明なり
- (三) 白馬鎗ヶ岳南方一軒の尾根上(約二千八百米)西方に向ひ稍鮮明なり。
- (四) 乘鞍岳龜ヶ池南方高地のものは鮮明なり。

二、形態及組成岩石

- (一) のものは第一圖に示したるが如く並行のものにして其方面は最大傾斜線に一致す。礫はラビリにして大なるは一糶

飛驒山脈に於ける構造土の新紹介

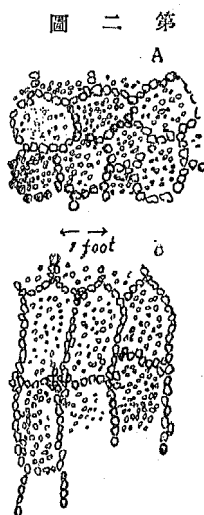
より七糶位に及び畝の中間を充たすものは一糶以下のものなり、その長さ長きものは百米に及ぶ。
(二) のものは(一)と大差なきも平坦にして極めて緩き傾斜の所にありて(一)程鮮明ならず。



第一圖

(三) は千枚岩、綠泥片岩の角礫にして(二)と同じく並行にして礫の大きさも(一)(二)と略々同じ。畝の間隔も亦概ね前者と一致せり。之亦最大傾斜線と一致し長さは最長二三十米なり

- (四) は前三者と異り所謂 Pavement 或は Polygonboden



第二圖

に近き形態を有し(第二圖)礫は同じくラビリにしてその大さ亦(一)と大差なし、全く平坦なる場所に在るものは第二

圖aの如くなるも極めて僅かなる傾斜を得るに至れば輪は延びてbの如き形態となる。

前四者を通覽するにいつれも其礫の排列は岩石の種類によりて決定せられず乗鞍のラピリの如きも鏡下に檢すれば種々なる安山岩にして白馬館南方のものも亦綠泥片岩若くは千枚

岩の角礫の混合物たり、從つて畝及中間の岩石はその比重に關係なく全くその礫の大きによりて畝となり又中間充填物となる。

之等構造土の横斷面は第三圖に示すが如く礫の下に甚だ細かき褐色の土壤ありて水を含めば礫は全くその上に浮揚せるが如く一步踏み込めば一尺近くも沈下する所あり大雨又は雪溶けに際し大規模なるソリフラクシオンを生ずる時は恐らくこの土壤は水により飽和せられて甚だ流動し易き物質となるべし。駒草の

第三圖



西遊夢錄

(九)

瀧川規一

蘇國の部

(X) エナンバラ及び其附近

栽培に適するを以て飛驒小屋(乗鞍絶頂小舎)の者は摩利支天に之を栽培す之の上に載る礫は圖の如く大なるものは小なるものよりより以上沈下せり。

之等構造土ある附近は所謂フエルセンメーアにしてソリフラクシオンの盛なるは言を待たず、かくの如き高所ならずともよく觀察すれば崖錐の表面にも亦大小の礫區別排列して甚だよく構造土に似たる所あり而してこの崖錐のものは少く意味を異にせるものなるが如し。

平坦面には輪狀に傾斜面には畝狀に又この二者の中間の傾斜には二者の中間の形狀のものを生ず、而して並行畝のものは傾斜の大小によりその鮮明さを異にす。礫の下には細泥ありいつれも構造土成因の研究に對する想像の材料たらざるはなきも之等地方の構造土成生の原因に關する結論を下し得ざるを遺憾とす。乗鞍岳にかく構造土のよく發達せるはラピリがこの土壤を作るに適したる結果ならん。

(「アーサス・シート」臥せる獅子の姿をなせるこの山の山麓の清泉は登る者の耳を洗ふに足るであらうが、肉食國の人々